第三回（2015年３月２日）

原田の森から上ケ原への移転

― 立役者の一人　小林一三翁を中心に ―

大橋 太朗

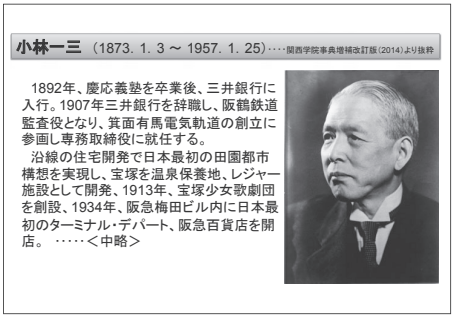
関西学院同窓会会長　阪急電鉄株式会社相談役

ご紹介いただきました大橋でございます。今日はこのような場でお話しできることを大変光栄に思っております。またこの講演会のラインナップを拝見しましたが、何か異質な人間が一人混じっているという感じがして仕方ありません。喋りのプロに伍して、こういうところで喋るのは苦手ですので、パワーポイントでできるだけ「ごまかす」と言えば語弊がありますが、パワーポイントを見て楽しんでいただくというような趣向にいたしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。そして、この資料ですが、関西学院のほうからもたくさん提供していただいておりますので、また図書館あるいは学院史編纂室でも充分ご覧になれるものが多いと思います。

小林一三翁

これは小林一三翁の肖像画でございます。年齢からみますと、50歳代の半ばぐらい。小林一三翁の肖像画、たとえば小磯良平さんが描かれたものなどいろいろありますが、その中では一番お若いときの肖像画であります。これは、関西学院が創立40周年のときに功のあった小林一三翁と、また後でお話ししますが、河鰭節さん、このお二方を表彰されたときに、感謝状とともに副賞として、小林一三翁に贈られたものであります。この絵は今、池田にあります阪急文化財団に保管しております。小林一三記念館に入られたら、最初に目につくのがこの絵であります。カナダの画家、J.W.L. フォスターという方が描かれた絵であります。このフォスターという人は、いわゆる歴史画あるいは肖像画でかなり著名な画家であります。わざわざカナダから来日されて、小林一三翁を直接ご覧になって描かれたというのではなく、おそらく写真をもとに描かれたのだと思います。著名な外国の画家に絵を描かせて贈られたということは、大変感謝の意が深かったというふうに受けとめていいのではないかと思います。

これは、1929年の9月28日に行われました、関西学院創立40周年の記念式典であります。壇上の右の端に、先ほどお見せした絵が飾ってあるのが、ご覧になれると思います。小林一三翁がどこにおられるのかは、ちょっとこの写真ではわかりませんが。



これは創立125周年のときに改訂された『関西学院事典』に紹介されております、小林一三の項目の抜粋です。1892年、慶応義塾を卒業後、三井銀行に入行ということで、その後の経歴が書いてあります。

箕面有馬電気軌道（現：阪急電鉄）との関わり

小林一三翁略年表

1873(明治 6)年	1月 3日	山梨県韮崎市生まれ
1892(明治25)年	12月23日	慶応義塾卒業
1893(明治26)年	4月 4日	三井銀行入社 1893.9～1894.7、1899.8～1901.1 大阪支店勤務
1907(明治40)年	1月23日	三井銀行退社、新設証券会社支配人就任のため、一家で来阪。しかし日露戦争後の好景気の反動暴落により設立不可能に陥る。
	4月	阪鶴鉄道監査役に就任
	6月30日	箕面有馬電気軌道創立の追加発起人に就任
	8月 1日	阪鶴鉄道国有化、監査役辞任
	10月19日	箕面有馬電気軌道創立総会にて専務取締役に就任
1927(昭和 2)年	3月10日	阪神急行電鉄社長に就任

小林一三翁の略年表をここにまとめております。これは、一三翁がどうして阪急と関わることになったかということを示すものでもあります。1873 年１月３日に生まれたから「一三」であります。1892 年に慶応義塾を卒業しております。卒業後は、本来は慶応義塾の先輩であり、また大阪毎日新聞社、毎日新聞の創立にあたった渡辺治という方と一緒に、今の東京新聞の前身であります都新聞に入社する予定でした。もともと文学青年ですので、新聞社に入社し、小説でも書こうと思っていたところが、渡辺さんの毎日新聞社の退社が上手くいかなかった。退社が実現せずに、両方ともその話がなくなってしまったのです。それで明治 26 年、これも文学で尊敬していた先輩、高橋義雄という人にひいてもらって、三井銀行に入社しました。本来は、銀行、金融業には興味はなかった人物であります。三井銀行に入社し、大阪支店に非常に短い間勤務いたしております。実はこの短い勤務の間に、岩下清秀という、その後に関わりのある人と知己を得ました。三井銀行で勤務している間に、その岩下清秀という元大阪支店長、その当時はもう北浜銀行の頭取に転身していたのですが、その人からの誘いがありました。日露戦争の勝利の後の非常に好景気であったときに、証券会社を新たに作ろうと企画し、小林一三翁が目をつけられて、新しく設立しようとしている証券会社の支配人に就任するために、三井銀行を退社することになったそうであります。それで大阪に赴任するために一家で来阪しましたが、その翌日に、日露戦争後の好景気の反動といいますか、株価が暴落して、証券会社を新設するどころではなくなり、実際は路頭に迷ったわけであります。岩下という人はその責任がありますから、何とか小林一三に職を斡旋しなければならないということで、明治 40 年４月に、阪鶴鉄道の監査役という仕事を斡旋しました。この阪鶴鉄道ですが、実は既に国有化が決まっていた会社です。前の年に国有化法というものができていて、主要な幹線の私鉄を国有化するということが決まっていました。この会社の国有化の清算業務をやってくれということで、監査役に就任したわけです。一三翁は、後でですが、「阪鶴鉄道に拾われた」と、こういう表現を使っておられます。それで、清算業務にあたったのですが、阪鶴鉄道自体は国有化である程度のお金が入ってまいります。そのお金をどうしようかと考え、阪鶴鉄道で以前から免許をもっていた大阪、池田、宝塚、有馬、あるいは箕面を結ぶ路線、今の阪急電鉄、箕面有馬電気軌道となる路線の免許を活かして、新しい会社を作ろうではないかということを画策しておったわけです。一三翁は、初めはその気はなかったのですが、阪鶴鉄道の監査役をしている間に予定路線をみていたら、これはいけると自分で感じられて、箕面有馬電気軌道の創立追加発起人にさせてくれと自ら名乗り出て、この箕面有馬電気鉄道に参画しているのです。そして、阪鶴鉄道は国有化されて、監査役は辞任し、10 月に設立総会において専務取締役に就任された。こういう経緯です。ですから、いろいろ紆余曲折があって、結局は箕面有馬電気軌道の専務になられましたが、うまくいっていたら、文学青年ですから、小説家になっていたかも知れない。あるいは証券会社の社長になっていたかも知れない。こういうような運命の方であります。

創意工夫の人、女性尊重の人

小林一三翁という方は、先ほどの『関西学院事典』にもありましたように、創意工夫の人、そして、女性尊重の人でした。これは単にフェミニストということではありません。まず創意工夫の人というのは、需要を自ら創り出すアイディアマンでした。需要をなぜ創り出さなければならないかというと、箕面有馬電気軌道の特殊事情もあったわけなのです。もともと文学青年ですから、人間の行動には興味がある。またそれなりに人に対する観察力が鋭い。人の行動がある程度読める。その時代ですから、限られたものだったのかもわかりませんが、そういう人であります。そして先ほど申し上げました阪急、当時の箕面有馬電気軌道は、箕面、宝塚への遊覧電車だったのです。ですから旅客は不安定です。例えば、箕面。新緑の季節、あるいは秋のもみじの季節、これはお客様にたくさん乗っていただけますが、それ以外のときは、さっぱりだというふうに、季節変動があります。だから安定的な需要を創出しなければならない。せざるを得なかったという事情がありました。それで、そんなことは始めからわかっていたので、設立当初から 30 万坪の土地、これは住宅用地なのですが、手当してそれを販売しながら、「販売しながら」というのは、沿線のお客様を増やす、乗客を増やしながら経営をしていったわけです。現に、30 万坪の土地を売りながら、その土地の利益で会社の経営基盤を築いてきました。土地を売りながら、土地を食いながら、走る電車だというので、「ミミズ電車」と揶揄されたこともあるようです。

それからもう一つ、女性尊重の人でした。これは、この時代から女性もお客様だというはっきりとした認識があったということです。女性をターゲットに、婚礼博であるとか家庭博などを開催しております。当時は十九やはたちで結婚される方もたくさんおられたわけですから、そういった方へのアドバイス、あるいは結婚に備えたいろいろな展示などで、女性のお客様をつかもうとされました。それから、ターミナルデパートですが、これは、もう一面では通勤のお客様の利便を図るということもありますが、もともとは沿線で夫を送り出した奥様方には、暇で何をしていいのかわからないという場面もあるだろうと。そういうときはデパートへ来てお買い物をしていただく。あるいは今でいうウインドウショッピングですが、それで電車にも乗っていただけるという、こういう需要も創り出そうとしたわけです。こういう、大きく二つの要素を持った、大変ユニークな発想をされる方であったということです。

小林一三翁の事業戦略

（住宅開発）

その中で、事業戦略はいろいろあるのですが、まず住宅開発です。これは、当時は賃貸住宅が主流であったのですが、初の大規模分譲を行った。この後で、写真が出てまいりますが、池田の室町というのが代表する住宅地です。室町で当時販売した住宅、それがそのまま今も残っているということも聞いております。それから、田園都市構想です。これはその時代に割に流行ったことなのですが、英国のエベネザー・ハワードという方が提唱した田園都市論、これは都市機能と田園生活、この機能を統合させるということで、街造りの中に、都心で汚れた空気を吸うよりも、郊外できれいな空気を吸いながら生活するということを提唱されたのですが、これに一三翁も影響を受けられ、この室町の住宅地には購買所を造ったり、あるいは集会所を造ったりして、いわゆるコミュニティ造りも考慮されています。それから、養鶏場を造ったり、

養豚場を造ったりされて、いわゆる田園生活というのを楽しんでいただくというふうな形をとられたこともあります。

（遊園地）

次に遊園地です。箕面に遊園地を造られたわけなのですが、そこは動物園も併設しておりまして、これは全くの失敗でありました。箕面の動物園というのは、今のサファリ的な規模ではないでしょうが、かなり広いところに、金網柵だけで猛獣を飼っていたり、そういうものを見せる動物園だったのですが、よく考えれば、地震が起こったとき、この動物が逃げ出したらどうしようかと、これはその時代に本気に考えられたそうです。また、地震の心配であるとか、あるいは餌代が思っていたよりも高いとか、鳴き声や臭いが周辺に迷惑をかけるというようなことで、これは早期に撤退しておられます。

（新温泉）

その代わりにもってきたのが、新温泉。宝塚、武庫川の西側には旧の温泉がありましたが、新しく今のファミリーランド跡、大劇場のところに温泉を造って、「新温泉」と称したわけです。当時は、温泉といえば有馬温泉がありましたが、交通の便で、どうしても一泊旅行になります。宝塚は日帰りできますから、日帰りのレジャーになるような温泉です。この新温泉、中にはプールがあったりします。いろいろな形で新しい、いわゆる洋風の施設を取り込みました。実は室内プールも取り込んだりしました。これは海外では室内プールがあり、それを造れという指令を出したのですが、この室内プールが温水プールであるということに全然気がつかなくて、冷水でやってですね、結局は、不評をかった。それと、当時は男女混泳というのに、かなりの抵抗をもっておられる方がおられたので、このプールも大失敗でした。プールの水を抜いて、その上に板を張って、その上で余興を始めたのが宝塚唱歌隊、その翌年に宝塚少女歌劇というものになって、今おかげ様で宝塚歌劇として百年続いているわけです。ですから、箕面の動物園もそうですが、そういう失敗をうまく転じて、何をしようかというアイディアが浮かんでくるということでございます。

（野球場）

野球場では、西宮球場というのがありましたが、その前に豊中運動場で「全国中等学校優勝野球大会」、これは今の夏の高校野球の前身で、その運動場のあたりには今でもモニュメントがあるそうです。この当時、阪急にもう少しお金があれば、もっと大きな野球場を造っていて、今の甲子園の夏の大会を阪急でやれていたかもわからないのであります。

（ターミナルデパート）

それから、ターミナルデパート。先ほどちょっとご紹介しましたように、女性尊重ということなのですが、当時の既存の百貨店、三越や松坂屋があったのですが、ターミナルには立地していませんでした。高麗橋であるとか、いわゆる市の中心部にありました。そのために最寄りの駅から上得意のお客様をハイヤーであるとか人力車で送り迎えをしていたらしいです。それを見て、ターミナルに造れば送迎のコストはいらない、そのコストの分だけ安くできると、こういったことも大きな、ターミナルデパートを造ろうという要素であったらしいです。また、百貨店というのはいわゆる文化の発信地であるということでした。当時まだ珍しかった洋食というものを、上のほうの階の大食堂で提供しました。カレーライスなど、それも一種の洋食ですが、そういうものになじんでいただくというのも、いわゆる文化の発信の一つでありました。阪急百貨店の当時の大食堂で「ソーライス」というものがあったのをお聞きになった方もあるかと思います。テーブルにはソースと福神漬けはずっと置いてあったらしいのです。そして、

ライスだけの注文も断らなかった。手元不如意の方はライスだけを注文され、ライスにソースをかけて福神漬けで食べる、これで十分だということです。そういうサービスもあったようです。

（ホテル）

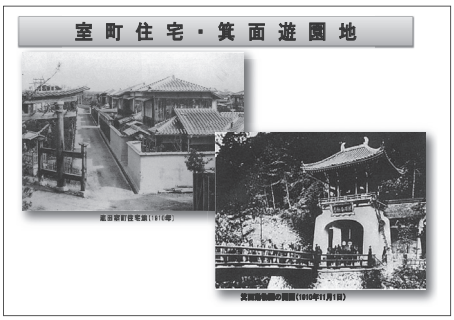
当時からのホテルは、今郊外型ホテルとして宝塚ホテルがあります。リゾートホテルとして六甲山ホテルがあります。こういった形で、ホテルにも興味を示していました。

（劇場）

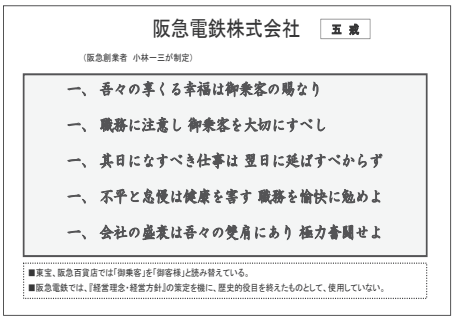
それから劇場です。宝塚大劇場、初代の大劇場というのは、大正 13 年、1924 年に竣工しております。それから、戦後になりますが梅田コマ等々、宝塚歌劇の上演だけではなく、もっと広く劇場（演劇）に興味を示しておられました。

（学校の誘致）

学校の誘致に関しては、後ほどお話します関学や神戸女学院です。



これは、左上が池田室町住宅です。右下が、箕面動物園になっておりますが、遊園地をかねた動物園です。右下は大失敗、左上は今でも残る住宅地です。この住宅地、小林一三翁は現金商売ということで、大衆を相手に現金ほどかたいものはないといっていたのですが、室町住宅の購入者には、当時日本で初めて割賦販売を採用しております。割賦販売を採用したというのは、もちろん購入のしやすさというのもありますが、10 年割賦であれば、とにかく 10 年間はこの家に住んでくれる。ということは、沿線に住んでくれる。途中で、お若い方で子どもさんでもお生まれになったら、もっともっと長い間住んでいただけるだろう。こういうような計算もあったようです。とにかくお客様が定住できる、こういうような環境を作りたいということに、一生懸命になっていたようです。


阪急電鉄株式会社　五戒

（阪急創業者　小林一三が制定）

一、吾々の享くる幸福は御乗客の賜なり

一、職務に注意し 御乗客を大切にすべし

一、其日になすべき仕事は 翌日に延ばすべからず

一、不平と怠慢は健康を害す 職務を愉快に勉めよ

一、会社の盛衰は吾々の双肩にあり 極力奮闘せよ

■東宝、阪急百貨店では「御乗客」を「御客様」と読み替えている。
■阪急電鉄では、『経営理念・経営方針』の策定を機に、歴史的役目を終えたものとして、使用していない。

これは、今は使っておりませんが、私が阪急電鉄に入社したとき、この五戒、五つの戒めというものがありました。これは給料袋の上に印刷されておりました。文章はみんな古くて読みにくいのですが、これの上二つにご注目いただきたいのです。「吾々の享くる幸福は御乗客の賜なり」「職務に注意し御乗客を大切にすべし」。これは小林一三翁が制定された五戒です。ですから、百年前から、お客様目線です。これに基づいて、良いものを安くということになってくるわけです。お客様への感謝の気持ちも込めて、顧客至上主義がずっと貫かれています。

原田の森の関西学院

ここから、関西学院の「原田の森から上ケ原へ」になります。原田の森キャンパス、これは皆様方のほうがよくご存じだと思いますけれども、1889 年、神学部と普通学部とで創立され、その後学科を増設していきまして、1912 年に高等学部（文科・商科）を開設し、1918 年に新

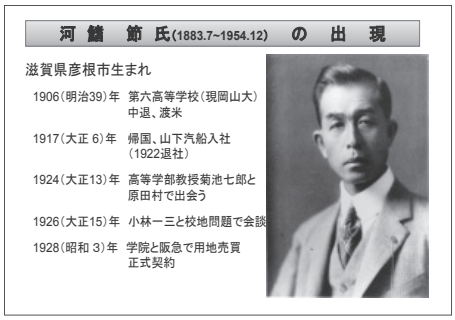
大学令が発布され、いわゆる私学でも大学を創設することができることになりました。「学生総会で大学昇格促進が決議」されるなど、いろいろな事項が理事会で決議されたりということがありまして、この前後に大学設置の機運が非常に高まっていたということです。それから、1921 年、高等学部を文学部と高等商学部に分けました。こういう形で、原田の森が発展してきて、学生数もそれなりに増加していきました。

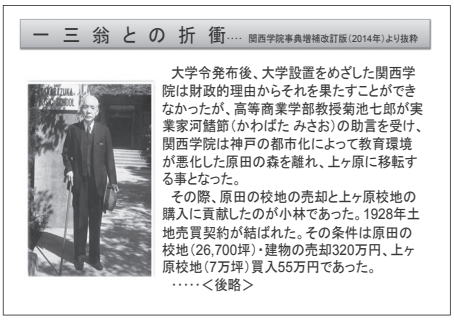
これは、もうあちこちでご覧になっていると思いますけれども、小金丸勝次先輩の楽しいイラストです。ここで、この左側に阪急とありますのは、阪急の上筒井駅､終点であります。そこから線路が出て、本来は｢至る梅田｣にならなければならないのが､｢至る宝塚｣になって、その先には、ちょっと見にくいでしょうが、すみれの花咲く頃ということで、ラインダンスの絵が描いてあります。非常にユーモアのあるというか、当時の学生気質をよく表したものではないかと思います。

これは、先ほどのイラストを地図に落とした、関西学院原田の森周辺の地図です。上筒井の駅は、関西学院のキャンパスの西側、数百メートルとなっています。ご覧のように､神戸市電と接続しております。上筒井の駅ができるまでは、いわゆる省線、今の JR ですね、そして阪神、これが最寄り駅としてあったわけです。国鉄の灘駅、阪神の岩屋駅が近かったのですが、この上筒井が一番近くなりました。

これが当時の上筒井駅の写真です。先ほどの地図でお分かりのように、北西に向けて入っています。これは六甲山系ですね。先ほど原田の森での発展をご紹介しましたけれど、新大学令が発布され、関学でも大学設置の機運が高まったわけですが、如何せん財政上の問題が一つあります。もう一つはキャンパス、校地が狭い。財政上の問題としては、供託金が 60 万円、用地としては 10 万坪が大学設置には必要でありました。それから、環境の悪化、これは市街地の発展ということで、当時の脇浜地区にあった工場がどんどん大きくなってきて、いわゆる大気汚染とまではいきませんが、大気の状態も悪くなっていました。立ちはだかる問題は大きくこの二つであったわけです。

河鰭 節と小林一三翁の折衝





そこに現れましたのが、河鰭節さんです。滋賀県彦根市生まれ。1906 年に第六高校、岡山大ですが、ここに中退と書いてありますが、卒業されたという説もございます。この中退というのは、河鰭節さんの追想録の『菊に偲ぶ』という本が出されているのですが、そこに中退とありますので、中退というふうに書かせていただきました。ひょっとしたら間違っているかもしれません。中退してアメリカに行かれた。アメリカではオレゴン大学で学ばれたということも書いてありますけれど、アメリカでは新聞記者であるとか、農園を経営されたり、そういった仕事をしておられたということで、1917 年に帰国され山下汽船に入社されております。

そしてこの運命的な出会いなのですが、1924 年に高等学部の菊池七郎という先生と原田村で出会うことになります。お隣同士に住んでおられました。そして子どもさん同士が、仲が良くて、その縁で、河鰭節さんと菊池先生とが親しくなり、先ほど問題として起こっておりました大学設置のための二つの問題ですね、それを河鰭さんに打ち明けられました。そうしたら、そんなこと簡単だと。今の原田の森の校地を売って、どこかへ移転して、その売却代で新しい大学を設置するとともに、広いキャンパスを手にしたらいいのではないかというふうに言われたらしいのです。ところが、この河鰭節さんは、関西学院には何の縁もゆかりもない方でした。菊池先生は河鰭さんの真面目な、真摯な態度で、これはお願いできるのではないかというふうな確証を持たれたようですが、なかなか関西学院の代表として、といいますか、この問題にかかわっていただくことについて、学院内部を説得するのに苦労されました結果、河鰭さんにお任せするということになり、河鰭さんが小林一三翁と校地問題で会談をされたということです。この河鰭さんと小林一三翁とは全く面識はなかった。どういうアプローチをされて、会われたのかというのは、実はいろいろ調べたのですが、全く記録に残っていません。一三翁も日記を割に丁寧に残しておられるのですが、このへんはお忙しかったのかもしれませんが、全くないわけです。河鰭さんは、アメリカで新聞記者もされたということです。新聞記者は、これは失礼な言い方ですが、大体厚かましいですから、アポイントもなしに飛び込まれたのかもしれませんが、この河鰭さんの熱意で、小林一三翁と校地問題で会談することができた。これはもっと調べなければいけないのですが、本当に、どうしてこういう接点を見つけられたのかというのは、今も私の中に謎として残っております。正式なお話は、高等商業部長の神崎驥一部長と小林一三翁との会談で話が決まったらしいのですが、神崎先生は、当時の院長はベーツ先生、文学部長は外国人であるというので、部長クラスでは自分だけが日本人であったので、小林一三のところへ「行かされた」というふうな表現をされておられますが、正式な会談で話がまとまり、1928 年ですが学院と阪急で用地の売買契約が結ばれました。

（ページ上部）右のスライドは、『関西学院事典』の小林一三の項目の後半部分で、今申し上げたようなことが書いてあります。

原田の森校地の売却と上ケ原校地の購入

上ケ原土地との売買成立		
原田の森校地・建物売却	320万円	(26,700坪)
上ケ原用地買収	55万円	(70,000坪)
差引	265万円	
供託金	60万円	
校舎等建設費	160万円	

その内容というのは、原田の森の校地、これを320万円で阪急に売る。そして、上ケ原の用地ですが、これを55万円で買収する。これは7万坪ということになっていますが、実測したら9万坪ぐらいあったという説もあります。差引265万円のお金が残ります。それで、先ほどから申し上げております、大学設置の供託金60万円、そして校舎等の建設費160万円、これも210万円というような説もあったりして確定はしませんが、まずは265万円の範囲内でなんとかできた数字であります。こういう交渉が成立しました。神崎先生が小林一三翁と会われたときに、一三翁がいったい原田の校地の値打ちはあなたはどのぐらいあると思っておられるのかというふうに聞かれたらしいです。「いったいなんぼで売るねん」というようなことを聞かれたらしいです。神崎先生はもちろん、そんなことはご存じないですから、「むしろ実業家のあなたのほうが、こういう土地の価格設定というか、評価には詳しいだろう。とにかく大学を設置するために、原田の校地を売るのだ」ということをおっしゃった。そして、一三翁は、「それではどういった条件が必要なのか」ということを聞かれて、「60万円の供託金と10万坪の土地」ということを神崎先生がお答えになった。それから、「320万」という数字を、一三翁が簡単なメモに書いて出された。これを神崎先生はお受けになり、後の正式契約にうつるという段取りになっていたようです。

上ケ原への移転

移転当時の上ケ原

1941(昭和16)年 関西学院中等部半泉記念誌より

移転当時の上ケ原（小林 泰次郎氏 画）

左の写真は、移転当時の上ケ原です。これはあまりご覧になられたことがないと思います。リヤカーか馬車かわかりませんが、この周りの畑の中に一本道があります。甲山は山火事がよくあったようで丸坊主になっています。貴重な写真です。

右の絵は、皆さんご覧になったことがあると思いますが、小林泰次郎という方が描かれた絵です。先ほどの写真に比べると、こちらには並木が植えられています。そして甲山の禿げたところも、だいぶん小さくなっているという、こういう絵です。実は、この小林泰次郎さんですが、小林一三翁の遠い親戚にあたるかたです。「またいとこ」の次男ということです。泰次郎さんは、琵琶湖ホテルの社長などを歴任されましたが、そのかたわら洋画家でありました。一時は小林一三翁と一緒に絵を学ばれたこともあるそうです。泰次郎さんは慶応の出身なのですが、ご子息は関学の高商の卒業であります。そしてそのご子息は、私が阪急に入社したときの上司でありました。これは、この絵で逆に初めてわかったということでもあります。

もう一人の功労者、芝川又右衛門

これまで、小林一三翁と河鰭節さんの話ばかりいたしましたが、もう一人功労者がおられます。それは芝川又右衛門さん。そして、芝川さんの経営される千島土地株式会社であります。芝川又右衛門さんは、昔でいう武庫郡甲東村、この一帯の大地主であります。土地自体は貸金の担保流れで取得されたらしいのですが、学院用地の土地集約にずいぶん協力をしてくださっております。千島土地株式会社は、今も続いている芝川氏が経営する不動産会社です。1922年に芝川氏が土地・資金を阪急に提供して、自ら所有する甲東村の土地の利便のために阪急に駅を造らせた経緯があります。その駅が甲東園駅で、以前の駅名は甲東園前でした。また、ここで土地・資金を提供したとありますが、その土地というのは一万坪ほど提供していただいております。阪急は翌年にその土地で住宅経営をして儲けております。それから、この千島土地が駅前から自らの所有地まで、道路を自前で建設しております。そのあと関学が移ったのですが、そういう道路があったという利便性も関学の用地決定の一要素となったということであります。この土地自体は、大半は阪急と学院との売買契約になりましたが、その前段で錯綜しておりました土地所有者の集約に、芝川さんにずいぶんご協力をいただいています。自らの土地を交換提供してまで、その集約にご協力をいただきました。

これは、当時のポスターです。ご覧のように、西宮北口が真ん中にありますが、その次が門戸、小林になっております。甲東園はまだございません。そして、夙川のところを見ていただいたら、甲陽園に行っている線もありません。そのかわり、左に「カルバス温泉　甲陽園」、夙川駅が一番近くて、自動車の便ありとあります。このポスター、これは1921年です。このへんのポスターにも、かなり小林一三翁の意見といいますか、趣味が反映されているようで、こういうロゴ、キャッチフレーズも、かなり自分で墨を入れて、訂正されたようです。これは文学青年の躍如な活躍というのですか、そういうところがあります。

阪急電鉄の発展と関西学院

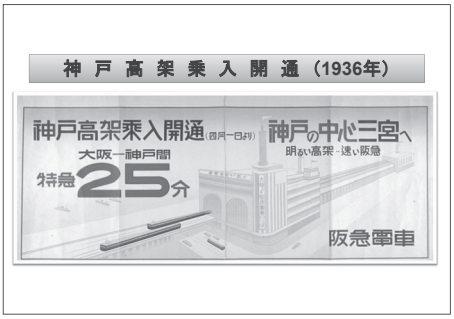
（阪急の神戸都心乗り入れ）

さて、上筒井まで阪急の神戸線は開通していたのですが、都市間鉄道としては上筒井の終点では役に立たない、どうしても神戸の都心、三宮まで乗り入れなければということは始めからわかっていたことなのです。ところが、諸般の事情で一旦は上筒井までで開通したのですが、このとき既に三宮までの免許は申請をしていました。その申請した免許というのは、いわゆる地下式、地下で三宮に乗り入れるという免許を持っていましたが、1927年、神戸市内の延長線の免許を高架式に変更しております。地下はやめて、高架にして乗り入れるということであります。なぜかというと、建設費が地下ではかなり高い。工期が非常に長くなる。この二つの理由です。それに踏み切らせたのが、1926年、関西学院の移転について河鰭節さんと小林一三翁が会談し、原田の森用地が取得できるという計算があったのではないかと推測しており

ます。そして、1929 年、やっとこの高架式に変更することが認可されました。そして 1936 年に神戸市内延長線、三宮までの高架での延長線が竣工し、営業を開始したわけです。

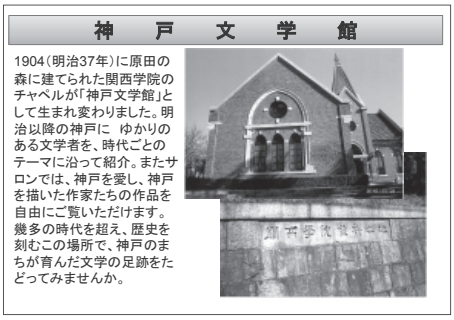
1919 年に地下式で申請してましたが、先ほどご説明しましたように、途中高架式に変更しました。そのため高架は騒音の問題でうるさい、それから町を分断する、景観上の問題もあります。また、今でもそうかもしれませんが、昔はブレーキシューで車輪をしめてブレーキをかけておりましたので、鉄粉が飛ぶ。そして、地震であるとか、あるいは空襲のときの安全性という面でも、非常に問題になったわけです。騒音の問題というのは、皆さんシカゴの町の高架鉄道を映画などでご覧になったことがあると思いますが、昔は、いわゆる鉄桁で、鉄の高架のイメージが神戸市民、沿線間にあったらしいのです。あんなにうるさいのはかなわないと。でも、この時代からスラブ式、コンクリートで作る高架になっておりますので、騒音の問題は軽減されています。そして、反対をしている間に、阪急の梅田～十三間の高架が完成しています。それから省線、今の JR ですが、神戸市内の高架工事も進捗していた。そうした実績もあり、鉄道省というそのときのお役所も、高架乗り入れは仕方がないという判断をしていましたが、いろいろな形で政治問題化して、猛反対が継続していました。それを阪急のほうは粘り強く説得していたのですが、この原田の森の土地取得ということが表面に出た 1928 年の 8 月ぐらいから、市議会は条件闘争に変わりました。現金での財政支援、これは神戸市に対する現金支援です。それから旧関西学院敷地、原田の森の敷地の提供というような要求に、徐々に変わってまいります。1933 年、やっと神戸市と妥結して、契約を締結することができました。そのときの条件というのは、現金 100 万円を神戸市に提供すること、そして、旧関西学院敷地に道路を敷設すること。これは旧関西学院の南のほうの土地を東西に貫通する道路です。今までの神戸市電の終点を石屋川まで延長する非常に大きな道路計画があって、その道路として 2,400 坪を無償提供する。こういうことで、やっと神戸市と妥結したわけです。

これは、今でいいましたら王子公園駅付近の分岐です。電車はまだ上筒井のほうへ行こうとしております。それの左側が、現在も使っております高架であります。この分岐付近は今もその跡が残っております。だいたいご想像いただけるような形のとおりになっております。この土地なのですが、阪神淡路大震災のとき、部分ごとに、細切れに開通していきました。そのため、この三宮地区には電車が一本もありませんでした。その電車を搬入するのにこの用地を使って搬入したという、こういうことにも役立っております。



これが、念願の高架乗り入れと言っていますけれど、三宮までの乗り入れであります。特急 25 分。今は停車駅が多くなっていますが、今よりも速いです。それから、ここにうっすらとご覧になれると思いますが、阪神淡路大震災で潰れました、神戸阪急ビルの東館です。これがオリジナルな姿であるということです。

（現在の王子公園一帯と阪急今津線）



最後にこれが、原田の森時代の唯一残る関西学院の建物、ブランチ・メモリアル・チャペルです。左側の文章は、この文学館の案内パンフレットに書いてあります文章そのままであります。神戸市も、この記念すべき建物を非常に大事に残してくれています。そして、敷地の石垣に、「関西学院発祥の地」というものがはめ込まれています。

これは、小林一三記念館です。一番初めにお見せした写真が飾ってある小林一三翁の業績を紹介している建物であります。池田駅から北へ徒歩 13 分、ぜひ一度ご覧になっていただきたいと思います。いろいろな形でご参考になると思います。建物は旧の小林一三邸であります。

関西学院 創立 125 周年、宝塚歌劇 上演開始 100 年
――いろいろな形で歴史を刻んだ先人の努力に感謝する時

結果として一つの学校の移転により、今津線沿線は非常に特別な文教地区として発展しました。そして旧原田の森用地は、現在王子スタジアム、原田の森ギャラリー、それから文学館、王子動物園といったいわゆる文化ゾーンに発展してきたわけです。一つの学校の移転が、二つの文化文教ゾーンを形づくることになりました。

これは 2011 年の映画「阪急電車」、今津線沿線が特別な場所、好ましい沿線として描かれています。こういったストーリーにして、話を終わらせていただきたいと思います。

2014 年は、関西学院が創立 125 周年、そして宝塚歌劇が上演開始 100 年という記念すべき年になりました。この周年行事というのは本当にいろいろな形で歴史を刻んだ先人の努力を偲んで、我々が現在あることを感謝するという、そういう機会に是非していきたいと思っております。これは関西学院の場合でもそうなのですが、一人でも多くの人が先人の努力に感謝し、形に表わす、私はこれを記念募金に結び付けたいのですが、今日は遠慮させていただきます。

どうも長時間お聞きいただきまして、ありがとうございました。

掲載図版　出典・所蔵　一覧表

ページ	タイトル（内容）	作者・出典・所蔵
P28	小林一三翁　（フォスター画）	画：J.W.L フォスター　阪急電鉄（小林一三記念館） 写真撮影：講演者（大橋氏）
P28	関学 40 周年記念式典（1929.9）	（小林一三翁への感謝状贈呈式）関西学院
P28	小林一三（1873.1.3 ～ 1957.1.25）	説明文：「関西学院事典 増補改訂版」写真：阪急電鉄
P32	室町住宅・箕面遊園地	阪急電鉄
P32	阪急電鉄株式会社　五戒	阪急電鉄
P33	原田の森イラスト（小金丸氏）	画：小金丸勝次「原田乃森　思ひ出の地図」関西学院
P33	原田の森　周辺地図	「神戸市内高架線史」　阪急電鉄
P33	阪急　上筒井駅	阪急電鉄
P34	河鰭　節氏 の出現	写真：「1929 年高等商業学部卒業アルバム」関西学院
P34	一三翁との折衝	説明文：「関西学院事典 増補改訂版」写真：阪急電鉄
P35	移転当時の上ケ原	「関西学院高中部百年史」　関西学院
P35	移転当時の上ケ原（小林泰次郎氏）	画：小林泰次郎　関西学院
P36	阪急電車ポスター（1921 年）	阪急電鉄
P37	工事写真（分岐付近）	阪急電鉄
P37	ポスター「神戸高架乗入開通」	阪急電鉄
P38	神戸文学館	説明文：神戸文学館ホームページ 写真：講演者（大橋氏）撮影
P38	小林一三記念館	写真：講演者（大橋氏）撮影
P38	映画「阪急電車」	写真：講演者（大橋氏）撮影